

ブリーダー

岡本俊弥

「もうちょっとおさんぼしなとだめですねぇ。かけつことか」

「はは、走るのはしんどいな」

「だめだめ、はしりましょ、がんばって」

「がんばるか」

「そうそう」

すると、画面の向こうも笑顔になる。いかにも嬉しそうに笑う。

*

再雇用期間が終わった。

二回目の定年を迎えた後どうするかは、人によりさまざまだ。

ある程度の地位があれば、会社に残って顧問に就くとか、関連会社に横滑りしたりとか、研究職なら私学の教授になることも。幹部クラスだったらよりどりだ……というのは、はるか昔の夢物語だろう。

老人が余っているいまはありえない。

どちらにせよ、無冠のおれなんかは非該当だけどさ。

そのうえ単純労働が少なくなった。いくら老人のコストが安いといっても、人件費がかかる仕事は削減されるのが世の常だ。

機械化、DXって、要するに人減らしだよな。

もう仕事を探す気はなかった。

妻はまだ働いていて、おれも年金が出ているから、二人分合わせればそこそこの額になる。介護や子育ての手間もない。おれが働く必要はないのだ。幸いおれも妻も浪費家ではない。

退職金で外車を買ったり、世界一周旅行なんて馬鹿げた散財はしなかった。儉約したというより、興味が無いのだ。BMやベンツのどこがいいか分からないし、移動時間が大半の旅行なんて馬鹿馬鹿しい。

ただ、おれにはこれといった趣味がない。

ものの本によれば、立派な趣味を持つことで精神的な余裕ができ、金はなくても悠々自適の生活が送れるらしい。

いまさら、趣味と言われてもな。

さらに、老齡遊民生活を送るためには前提条件がある。最初に生活をミニマムにする必要があるのだ。たくさん抱えていても、収入や体力が落ちていく老人には支えきれない。

まず、家から何とかしよう。

狭い持ち家はメンテを怠っていたせいもあり、インテリアもエクステリアもずいぶん傷んでいた。破れた壁紙を張り替え、荒れたフローリングの床を補修する。寝室の壁紙がめくれ上がるのは湿気が抜けないせいだ。共稼ぎだと、平日に風を通す時間が

とれない。安物の合板床板は、椅子を動かすなど、ちよつとした傷がもとで表面が剥がれてくる。

DIY用なら、たいていのブツは通販で買える。床はシートを貼って、クレヨンのような口ウを塗りつけければ目立たない。

プロのようにうまくはいかないが、来客が多いわけでもないし、まあいいだろう。色が褪せた古い壁紙は、わざわざ剥がさなくても、のり付きの壁紙を買ってきて重ね張りすればいいのだ。

ただ、届いたものは思ったものと色味が違っていた。

「何よこの色、みどり？」

妻は不審そうだった。

「あー、森をイメージして」

淡い緑を選んだつもりだった。来たのは黄色みがかかっていた。

「森？ ふーん」

一人でやると、一室二日かかりでたいへんだった。特に天井は難度が高い。不揃い

の継ぎ目が目立つ。

なんだか落ち着きのない壁紙になったが、まあいいだろう。

棚に溢れた雑誌だとか、古い本、埃にまみれた家具は思い切って処分する。スプリングの壊れたソファや、足がぐらぐらの椅子は廃棄。すり切れた絨毯は棄てる。リビングは座卓だけあれば十分だろう。

ただし、妻の領分である小さな机だけはそのままにした。

「わたしのところは、ほっといてよ。ぜったいに触らないで」

勝手なりリフォームを快く思っていない妻から、嚴重に言い渡されているのだ。

おれ用の机とかはもともとない。

家で仕事はしなかったし、作業スペースが必要な趣味も持っていなかったからだ。

妻の私物以外が、整理の対象だと思うことにする。

クローゼットの中のスーツ、コート類は処分。もう着ないワイシャツとかネクタイ、靴下、通勤の革靴も処分。鞆も処分。断捨離とか格好つけて言うけど、おれの場合は何のためらいもなかった。

過去は捨てる。見たくもない。

家の外構にはちよつと手間取った。放任された植え込みが盛大に茂っている。広くはない。ほんの小さな庭だった。

家を買ってすぐ、いいかげんに植えた数本の木が、枯れもせず生存競争を繰り広げていた。枝が入り組んでぐちゃぐちゃだ。木にもよるが、十年も放置すると、二階家の屋根ほどまで盛大に育つ。

こんなんでかくなっていたのか、じっくり見ることもなかったからなあ。

落ち葉の掃除も怠っていた。足場を作るだけでも一苦労だ。

ホームセンターで買った植木鉢とのこぎりで、ひたすら剪定する。

ようやく日差しが通るくらいまで刈ったころには、落とした枝と葉で庭が埋まっていた。これだけあると、家庭ごみには出せない。捨てるのも面倒だ。

植木屋に頼んどきゃ良かったな。

なんでもDIYはやり過ぎだが、家庭メンテナンスなら趣味になるのかも、と思ったのだ。だが、やれることは季節が終わる頃にはなくなっていた。

大邸宅じゃないからな。

ネット配信のニュースフィードを隅から隅まで読み、SNSを流し見て、ネットテレビの連続ドラマをひたすら最終話まで見続ける。確かに面白かったが、だんだん飽きてきた。集中すればするほど、気力が失せてくるのだ。趣味がない、という意味がようやく分かってきた。

休日の時間つぶしならこれでいい。週が明けたら仕事があるから。でも、あと何年、いや何十年間、毎日これ続けるのか。けっこう深刻な問題かも。

「ブリーダーになってみませんか」

そう書かれたチラシを見たのはその頃だ。自治体の広報誌に挟まれていた。

「この地区にお住まいの皆さまからブリーダーを公募しています。ご興味がおありでしたら、ご連絡をこちらまでお願いします」

簡単すぎる説明文だった。なんでペットのブリーダーを役所が公募するのか。

よく見ると、主催団体名には「株式会社次世代知能技術研究所 NTL」と書かれている。通勤していたころ、毎日その建物の前をバスで通り過ぎていた。結構広い敷地に、低層の建物が建っている。少なくとも、おれが家を買った頃にはすでにあつた。得体の知れない研究所だった。だが、そもそも関心がなかったから、素性をホームページで調べたことさえない。

株式会社の研究所なのか。企業出資の研究所という意味かも知れない。

少なくとも公立じゃないな。

興味を引かれたのは中央に置かれた写真、あるいはCGだった。それは四角い枠の中で、にやりと笑う猫だった。

アリスのチェシヤキャットか。アニメ調ではなくリアルな猫だが、不気味さはなかった。そういうふうに乗ってあるのだろうが、なんとなく親しみが持てた。

似てるな。

猫の下にQRコードが印刷されている。思わず端末に読み込ませてみた。すると、チャット画面が現われた。

「ご応募ありがとうございます」

「質問はいいですか」

「どのようなことでしょうか」

「これって、ロボットみたいなもの？」

「はい、ある種のロボットですが、物理的な存在ではありません」

「どういうことですか」

「NTLで行われている、インターフェイス研究を実証するために作られたアプリです」

「意味がよく分からないのですが」

「申し訳ございません。これは会話するアプリで、雑談を楽しめるものです」

「じゃ、ブリーダーってどういう……」

「話し手、つまりアプリはまだ十分に成長していません。ご応募いただいたブリーダー

ーの皆さまに、その成長を助けていただきたいのです。ちょうど、犬や猫を育てるように」

「繁殖する方じゃなくて、養育する方のブリードですか、そういうゲームなのですね」
「ゲームではありません。決められたゴールはなく、育てることにより実際にアプリは成長します」

「ゴールがないとなると、終わりはどうなるのですか」

「この研究は長期にわたります。ブリーダーの方のご都合が付く限り、続けていただくことができます」

「育てるって何をすれば」

「会話です。必要なのは会話だけです」

「猫の写真が入っていたけど」

「相手を人間にすると、現実的な予断が入ってきます。現実からできるだけ遠ざかれるように猫を選んでいきます。姿はご希望により変えられます。犬などのペット類、牛や馬などの家畜、野生動物、鳥類や爬虫類を望まれる方もおられます。しゃべる動物

相手なので、緊張感なしに会話ができるのです」

「猫としゃべるのですか」

「お望みなら」

「猫の外見は変えられるのですか」

「可能です、種類や大きさ、模様など何なりと」

妙な成り行きだった。細かい条件など聞かずに、おれはそんなチャットをした。相手が誰かも分からないが、機械だったのだろうと思う。

猫を飼っていたことがある。

血統書のない雑種だったが、サバトラのスリムな猫で、真正面からは一見アメシヨーに見えた。昔の写真はあまり残っていない。手元にあった古いプリント写真をカメラで撮って送ると、自動的に補正されて確かにそれらしい外観の猫になった。

アプリが動くようになってから、毎日猫とおしゃべりをしている。

PCはないので、端末かキャストしたテレビを使う。画像は鮮明だった。

顔の表情は人間的だ。猫にはもともと表情筋はない。感情を体全体の動きで表現する。この猫は人間と同じなのだ、表情がある。最初は少し違和感があった。ただ、手は時々猫のように耳を後ろからなでつける。人間のような仕草と、猫のしぐさが入り交じった動きをする。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

「いいおてんきですね」

「そうだな」

「おさんぼしましょう。そとにいきたい」

「ああそうか。行きたいのか」

「いきたいいきたい」

「わかったよ、行こう」

妻はとっくに出勤している。おれは端末を持って玄関の扉を開ける。

明るい外に出ると、フクスケにもカメラを通して外が見える。おれは片手で画面を

見ながら話すのだが、そんな斜め方向の視点からでもよく見えるらしい。

「おさんぽおさんぽ」

呼び名がないのでは不便なので、おれは猫にフクスケという名前を付けた。猫は何匹も飼ったことがある。最後の猫の名前だった。

いまフクスケはにこにここと笑っている。散歩が、というより戸外を見るのが好きなのだ。こんなふうには、本物の猫と一緒に散歩したことはない。おれが飼っていた頃は、自由に外へ出していた。いまだきの室内飼いの猫だと、ハーネスを付けて犬のように出かけるらしいが。

公園までの街路樹の下を歩く。

「この木は桜だ」

「さくら」

「いまは葉っぱだけだけど、春には、花が満開に咲いてきれいだよ」

「みたいみたい」

「今はムリだな。また来年の春だ」

「ああ、らいねんですか」

「すぐくるさ」

「すぐすぐ」

浮き浮きした声で答える。来年がどれぐらい先か、よくわかっていないようだった。おれにとってはすぐだけど、子どもには遠い先かもな。

いや、子ども、こいつは子どもなのだろうか。

毎日散歩するようになった。

公園を歩いて木の名前を教えたり、隣の住宅地にある知らない公園まで歩くこともある。飽きてきそうだが、フクスケは毎回違うことに興味を示した。

外に出ないときも、よく会話をする。それまでは、通話のみに使われていた端末だった。会社を辞めて二年も経つと、通話はめつたに入らなくなる。

人間関係の希薄さだな。

親しい知人は多いと思っていたが、仕事があつてこそその話だ。薄情だけど、人それぞれだからと半ば諦めていた。

端末が置きっぱなしにされることはなくなった。

「言葉を覚えていくとか、そういう手助けですかね」

「語彙数にはあらかじめ上限があります。数え方によるのですが、およそ一七〇〇語ぐらい。これは固定されているので、大きくは増えませんが、何かを憶えると、何かを忘れてしまう」

「言葉じゃないとすると、何を育てることになるんですか」

「言葉の数が問題ではないのです。われわれは、知能は知識の多さに依存しないと考えています」

「分らないな。具体的には何なのですか」

「人ではない生き物でも、知能を持つことはご存じでしょう」

「猿とか、イルカとか」

「ええ、類人猿とかは遺伝子的に人に近いから、クジラ類は脳が大きいから知能も高度と言われてきましたね。ただ、頭の良い生き物はそれだけではない。たとえば、

道具を使う鳥類のカラスとか、ニューロンが多い頭足類のタコとかが有名でしょう。限定的ではありますが、魚類にも知能があると言っただけかまわらない生物がいます。そういった生き物は脳も小さく、われわれが使うレベルの言語も持ちません」

「脳の大きさでも言葉でもない、と言いたいわけかな」

「そうです。賢さは別のところに宿っている。たとえば、機械は大量データで学習された経験によって、高度な受け答えができます。しかし、人間並みの知能のように見えても、単なる反射運動にすぎない。言葉の多さに幻惑されてしまうからです。今回お使いになるアプリは、そういう誤認を避けるため語彙を制限しています」

「あの猫の名前だね」

妻はフクスケのアプリを見てそう言った。

「見た目も似てる」

「そういうふうにならなくても良かったかな」

「何年前かな」

「もう、四〇年くらい経つよ」

「ああ、そうだね」

しばらく黙り込んでいた。

妻はどう思ったのだろうか。話すときに気になった。

時間がどれだけ流れていようとも、変わらない気持ちはある。しかし、妻の顔には何も表われなかった。日常の世間話をしたときと同じだった。

「まあ、それで暇つぶしになるのならいいんじゃない」

ただ、フクスケと会話を始めようとはしない。向こうから話しかけても生返事をするだけだ。

「こんにちは」

「はいはい」

「おげんきですか」

「はいはい」

でも、こんなことは無理強いできない。どんなによくできていても、しよせんアップ

りなのだ。妻におれの趣味を押しつけるわけにはいかないだろう。

遠出するようになった。

電車に乗って都心に出た。引きこもっていたから、久しぶりだった。

雑踏を、目的もなく歩き回る。端末に向かってぶつぶつとつぶやきながら歩くオヤジは、ずいぶん怪しげだったろう。

「いっばいだね」

「いっばいだ。いつもいっばいなんだ」

「ごきんじよとちがいますね」

「そりゃ違うさ。街中だから」

「すごいすごい」

食事のできないフクスケ連れだと、店に入るのはなんとなく躊躇われた。腹も減るが、楽しそうなフクスケの顔を見ると、それだけで満足できた。

毎日話を続けていると、語彙が少なくともフクスケには知能があると感じる。いろんなことを言う。

「きょうは、おはなのこうえんにいきましよう」

「ぴよんぴよんしたいです」

「ぶらんこより、すべりだいがいいです」

「むしのおはなしをしてください」

何をしたいか、どこで遊ぶのか、何を話するのか、昨日は何をしたのか。しかし、それは大人の話題ではない。自分のことばかりで、まるで幼児だった。

だから、ブリーダーが必要なかもしれない。

けれど、フクスケはどういう世界に生きているのだろうか。端末の中にしかないのだ。その中に自分の部屋とかあるのだろうか。餌はどうなのか、外で食べられないとして、食事の概念はないのだろうか。

寝るのか寝ないのか。おれが寝た後は何をしているのか。

猫なのか人間なのかよく分からないが、どちらでもないだろう。生き物が育つ環境なんて全くなくて、会話だけがある。それで果たして成長ができるのか。

いろんな疑問がわいてくる。それをフクスケに訊いても、答えられないのは当然だ。

子どもの考えることじゃない。

子ども？

子どもとしか思えないけど、おれは子どもと遊んでいるのか。

月に一度、リモートでグループトークが行われる。

N TLの担当者とブリーダーとの会議だが、状況報告を当事者から聞くという趣旨の打ち合わせだった。一人一人、その月に何をしたかの感想を述べ合う。思ったことや感じたことを、適当にしゃべってあげればよいようだった。

メンバーは固定されていない。毎回違う顔ぶれになる。知り合いができないから、仲間同士という雰囲気にはなかなかならない。研究所も、ブリーダー同士の交流を望んでいないようだった。

見た限り、若いのも中年もいた。年齢のばらつきも、ある程度は配慮されたのだろう。それでも、年配者はいつも結構な割合でいた。

見知った顔があった。

会議中は声をかけなかったが、終わった後、端末でコールを入れてみた。

「よう、ひさしぶりだな」

先に退職した会社の同僚だった。向こうは技術だったから部署は違う。何かの仕事がきっかけで知り合った。歳は向こうの方が上だった。

「何してるんだ」

「何にもしてない。ああ、ブリーダーはしてる」

「仕事じゃないな」

しばらく世間話をした。

それから、フクスケの話をした。

「猫か」

「そっちはどうなの」

「象だ」

「象」

ビデオに切り替えて見せてくれた。小さな子どもがTV画面に手を振っている。画

面一杯に、笑顔に見える表情を浮かべた象が写っていた。

「象さんのババル。孫が喜ぶからな、でもまあ、孫が来る時しか呼び出さない」
そういう使い方か。おれとは違うな。

おれはフクスケの生きる世界の疑問を口にした。

「へえ、そんなこと考えたこともないけど」

すると、急に思い出したようにしゃべりはじめた。

「昔、何だったかな、お話だったかエッセイだったか憶えてないが、知能のあるペツトを開発したメーカーの話を読んだ。その会社は、仮想の世界を創って、そこでペツトを飼えるようにした。そういうビジネスだな。仮想なんだから、計算リソースさえあればどんな空間でも作れる。空間には他の仲間もいて、一種のコミュニティーができてる。そこで、小さなペツトを一から育てていくわけだ」

「本物のペツトのようなものか」

「ああ、いやそういう意味ではペツトじゃない。あんたの猫やうちの象と同じで、しゃべれるんだからな。教えれば成長していくし、仮想の体験であっても、体験は体験

だ」

「よく似てるな」

「ロボットにエクスポートして、こちらの現実を感じさせるとかもできる」

「体を持てるわけか」

「まあフィクションさ、そういうお話だ」

「だとすると、フクスケたちにもそんな世界があるのか」

「NTLは、世界があるなんて言っていないだろ。隠す理由もないんだから、現実にもないんじゃないかな」

「フクスケの五感は、端末のセンサにしかない。その上、住んでいる世界がないんだつたら、仲間もない。ババールとフクスケは知り合いじゃないわけだ。社会生活がないと、フクスケは正常に成長できないんじゃないか」

「ババールはあんたのとこみたいに常駐はさせていない。それでも、変だとは思えないけどな」

冷めた関係だな。

おれはしばらく考えるふりをした。

気の利いたセリフとかは、何も思いつかなかった。

「……お話の最後はどうなる」

「世界のリソースを買うにはお金がかかる。メーカーは時流をはずれて資金が足りなくなる。そうになると、世界を維持できない」

世の必然なわけか、世界があっても永遠ではない。資金ショートで世界が終わるのなら、惨めなバッドエンドだな。

「フクスケとかババールは、何を目的に生きてるんだらう」

「ふーん、入れ込んでるなあ。そんなことまで考えなくてもいいだらうに」

画面の向こうは、当惑しているようだった。こんなふうにした。

「やつらがペットロボットなら、主人に気に入られ、喜ばれることが目的になる。そう学習するように設計されている。だが、ババールが同じなのかどうかはよく分からない。あいつは孫のためにいつでも笑ってくれるんだけど、学習したからかどうかは分からないよ」

夜に夢を見た。

いつものように公園に来ている。

「このきのなまえは？」

「前に教えたろう、シラカシだよ」

「そうでしたっけ。わすれちゃいました」

「だめだな、ちゃんと憶えなくちゃ」

「あはは、でもぼくはもういっぱいなんですよ」

「なにが」

「あたまがちゃぶちゃぶ、あふれてきてます」

「せっかく教えたんだから。もったいないなあ」

「あはは、そうですね」

いっしょに笑った。

空が明るい。グラウンドは真新しい土が敷かれていて、雑草もない。

「あっちにいきましょう」

遠くで声がした。

あれ、端末をどこかに忘れてきたのかな。おれはちよつと慌てる。そんなはずはないがな、いつも手から離れたことはない。

「どこだ」

大きな声を上げる。

「あっちあっち」

声はどんどん遠くなっていく。

いつもなら何人かいるはずの散歩する老人とか、この時間なら帰宅する低学年の小
学生とかが誰もいない。

「勝手にいったらだめだ、待ってなさい」

待っても何も、足もないのにどこに行けるんだ。

おれは焦りを覚えはじめている。

「はやくはやく」

「だめだ、だめだ」

足がもつれて速く走れない。いや、どこに向かって走ればいいのか。

真昼のはずだった公園が暗転する。

街灯もまばらにしかない。

ああ、これは今日の話じゃない。

そこで目が覚めた。

おれは研究所のロビーで待っていた。

ブリーダーの研究をどこのグループが実施しているのか、調べるのに苦労した。ホームページには、ブリーダーなんて名前では出てこないのだ。脳科学や生命科学に関する細々としたテーマの紹介が、研究責任者単位で何階層にもわたって書かれている。もともと専門家のためのサイトなのだろう。

その中に、グループトークの司会者がいた。

直接連絡する方法がないので、研究所の広報を経由して面会を申し込んだ。ふつう

の会社なら、無職で個人の面会など許可されない。ただ、ブリーダーの一人で、一般的な質問ではないのだという与会つてくれることになった。

「きょうはどのようなご用件で」

ラフな恰好で、イメージした白衣も着ていない。学者にしては、当たりがソフトな男だった。

「ほんとうは、何をしているのか知りたくてね」

「……という」と

「隠していることがあるんじゃないか」

相手の笑顔が曇った。

「いまおれたちがやってるブリーダーの仕事で、育てているのは何なのか知りたい」

「どうしたんですか。何といわれても」

「子どもじゃないのか」

「子ども？ なぜそう思われたんですか」

戸惑ったようだった。

おれはフクスケとの会話をかいつまんで話した。

「そうお感じになるのはやむを得ない、いや、理解できません。でも、子どもではありませんよ。限定的な語彙を持たせた知能です」

「ここで研究しているのは純粹な機械じゃない、生物の脳の研究なんでしょう。機械知能じゃなくて」

男の所属するグループの研究テーマを言ってみた。

「なるほど、研究室の紹介文をご覧になりましたね。だとしたら、誤解されています。たしかに研究室では動物の脳の研究を行っています。いつだったかお話ししたと思うのですが、動物にはある意味での知性がある。ただし、それは人間と同じものではありません。たとえば、人間に近いチンパンジーを、人の子どもと一緒に育てても、ある程度の年齢までしか同等に育たない。限界があるのです。それは動物の知能が低いのではなく、物理的な感覚や、肉体という入れ物が人と同じではないからです。本質的に異なるものを同じには扱えない。われわれがいま研究しているのは、動物に肉体的な制約を外して学習させたらどうなるかです。学習内容の偏りを避けるために

は、できる限り幅広い体験をさせる。そのために、皆さん一人一人がセンサーとなる、五感の代わりとなる、そんなプログラムを開発したのです」

「よく分からんな。具体的にどういいう話なのか」

おれがまるで理解しないのに苛立ったのだろう。

男はしばらく黙り込んでから、おれを促すようにして立ち上がった。

「わかりました。言葉だけじゃ納得いただけじゃないでしょう。それならお見せした方が早い。ただし、ご覧になったことはブリーダーの方を含めて、いっさい他言無用でお願いします」

「おれは退職者だよ。秘密が漏れて困るような相手なんかいないさ」

ロビーからエレベータに案内された。

「同じことを聞くのかも知れないが、なぜ語彙数を制限する。単語数一七〇〇なんてすぐだ。幼児なら、最初はそんなもんかもしれないけど、だんだんと語彙が増えていく。いろんなことを憶えていくのが成長だろう。なぜそうしたんだ」

エレベータの中で、おれは訊いてみた。

「人間と合わせるためですよ」

男は謎めいた答え方をした。

一匹の大きな豚がいた。

丸々と太っていて、百キロくらいはありそうだった。ケージの中に四つ足で立っている。いや、そうではなかった。体はストラップで支えられ、固定されているのだ。目を閉じている。ふうふうと忙しない息が聞こえる。頭にはヘルメット様のカバーがかぶせられ、そこから無数の微細なワイヤが伸びていた。目はカバーに隠れて見えないう。ワイヤは頭の後ろで一本になり、さらに後方の装置まで天井を伝う配線につながっている。

ケージにはオーなのかゼロなのか、人文字だけ書かれたプレートが付けられている。ふうふうふうふう。息が気になった。

「なんで豚なんだ」

「霊長類、たとえばチンパンジーを実験動物にするのは、いまどき難しいんですよ。」

入手が困難だし、動物保護の倫理的問題がある。豚はその点問題が少ないのです。食肉にされる一般的な品種ですからね。この子の頭には脳の入出力をプローブする微細なニードルが数千本も埋め込まれている。その先には皆さんの端末からの入力がつながっている」

「寝てるのか」

「肉体的にはそうです。非常にデリケートな端子が埋め込まれているので、動き回られてはまずいのです」

「無理やりか」

おれのひと言に、男は心外そうに答えた。

「虐待ではありません。苦痛はない」

「ずっと寝てるのか」

「脳は目覚めています。信号からの入力を受けている間は」

「どうやって入力するんだ」

「皆さんにお願いしているアプリからの信号を、脳内の信号に変更して入れます。本

来は脳幹を経由する信号ですがね」

「でもアプリといっても、ばらばらだろう。それって、猫や象の姿をしたぜんぜん別の生き物じゃないのか」

「アプリの見かけというのは、皆さんのために便宜的に設けられたものですよ。必要なのは入力です。声、環境音とか、光、景色、振動や動き。誰でも持っている一般向けの端末でも、意外に豊富なセンサーが備えられている」

「一貫してないじゃないか。おれと他のブリーダーじゃ違うだろ」

「それは結局主観にすぎませんよ。事後的に事象をつなぎ合わせて辻褄を合わせるから、一貫しているように勘違いする。本来、五感を通して入る信号は、無関係でたらめなものなんです。つじつまの合わない情報は、どんどん棄てられている」

「じゃ、おれのフクスケ……アプリは、おれと何を話していたんだ。どういう意味がある、でたらめなのか」

「個々の受け答えは、各ブリーダーから学習した体験に基づいたものです。何を話してきたかに依存する。確かにインターフェイスをスムーズにするために、機械支援を

加えた加工はしています。しかし、それはあくまで補助であってすべてではない。少なくとも、あなたとこの子は会話をしていたんです」

おれがフクスケだと思っていたのは豚だったのか。

「何のための研究なんだ」

「この研究は、もともとは全身麻痺の患者に五感を取り戻すためのものです。脳からの信号を十分のプロローヴできれば、外部の機器やカメラ、マイクを通して、五体を取り戻したと感ぜられるでしょう。ところが、その途上の動物実験で新たな可能性が見えてきたのです。有機脳は機械よりも創造的なのです。機械は高度な模倣にすぎませんが、動物とはいえ有機脳は新たな創造ができる」

「創造、創造ってなにをだ」

「ブリーダーのみなさんが、このインターフェイス、アプリに期待したものはすべて違います。ほんとうのペットが欲しいのか、保母なのか、友人なのか。それとも、子どもを得たいのか」

そう言うと、男はおれを見た。

「それぞれの期待通りのものを創り上げたのはこの子なのです。機械では難しい。最初はごまかせても柔軟性に欠ける。ただ、残念ですが動物と人間とが百パーセント同じになることはできない。語彙に制限が生じて三歳の子どもに留まるのは、人間と動物との接点がそこまで留まるせいかもしれません」

おれには研究員の話はよく分からなかった。子どものように見えるのは、この生き物とおれとのつながりが、おれの記憶と共鳴し合っているからなのか。共鳴が呼び出した錯覚なのか。

「ブリーダーはたくさんいる。そんな一人一人に一匹の豚が応えられるのか」

「そこが、有機脳の可能性なのです。機械学習した人工知能より、何倍も人間の評価が高い。人間の感情によく応えるのです」

だとしても、それはもうこの豚の意味ではないだろう。研究所でプログラムされたのか、誘導されたある種の自動機械なのではないか。

ふと思いついて、おれは尋ねた。

「この子には名前はあるのか」

「名前は……、いまは番号だけで、名前で呼ぶことはありませんが、子豚の頃はドロレスでした。雌豚です。ゼロからナインまで候補がいましてね、最後に残ったのがこの子です。ドロレス・ゼロ」

うちに帰ったあと、おれはアップロードするときに使ったフクスケの写真をあらためて見た。

妻の机の上にある写真だ。

息子とフクスケは仲が良かった。

もともとフクスケがいたのだ。何年も一緒に暮らしてきた。

そのあとに、赤ん坊がきた。

フクスケは赤ん坊に興味津々で、泣き声が聞こえるたびにベビーベッドの前に走って行って座りこみ、首をかしげるようにして見つめていた。気がつくと、寝ている子の枕元で丸くなっている。

添い寝しているのかな、と妻と話をしたことがある。

這い這いをして、やがて歩くようになって、飽きもせずその後ろをついて回った。一定の距離をとって、転ばせないように注意しているようだった。子のほうも、フクスケの存在はすぐに意識した。抱き合って寝るようになった。

「ふくちゃん」

最初に憶えた言葉だ。

だが、ある日フクスケはいなくなつた。

毎日、窓を開けると外に散歩なのか縄張り確認なのか、とにかくふつと出ていく。どんなに遅くなつても、夕方には帰ってきた。たまに深夜になつたりするが、窓を引っ搔いて入れると騒ぐ。それが、何日待っても戻つてこなかった。

「ふくちゃんどうしたの」

あちこち探し回ったがどこにもいなかった。

それから、あるとき。

いるかもしれないと、公園に遊びに行つた日。

急に駆け出して、こんなことを言い出した。

「ふくちゃんがいた。つれてくる」

幼児の足だったが、たまたま他のことに気を取られていて、離れた位置にいた。ちよつと待ちなさい、と声を上げたのだが。

公園前の道路は車通りこそ少なかったが、道が大きく曲がっていて見通しが悪い。間に合わなかった。

その場にフクスケがいたのかどうかは、今も分からない。永久に分からないままだろう。フクスケは、それから帰ってくることはなかった。

妻の机は、もともと子のために揃えたものだ。保育が始まるまでまだ時間はあったが、お絵かき道具や絵本などが置かれていた。買ったばかりで、あまり使われてはいない。長い間そのままだった。

ただ、四十年は長い。

その当時から、まだ残っているのは、フォトスタンドのプリント写真くらいだ。色あせてはいるけれど、フクスケを重そうに抱いた子どもが写っていた。

いつまでも忘れまい、と思っていた子どもの記憶が断片的で薄れている。もう、そ

の二倍付き合ったフクスケと変わらなくなった。

もうどちらとも曖昧で、端末のフクスケの中に混ざり込んでいるのだった。